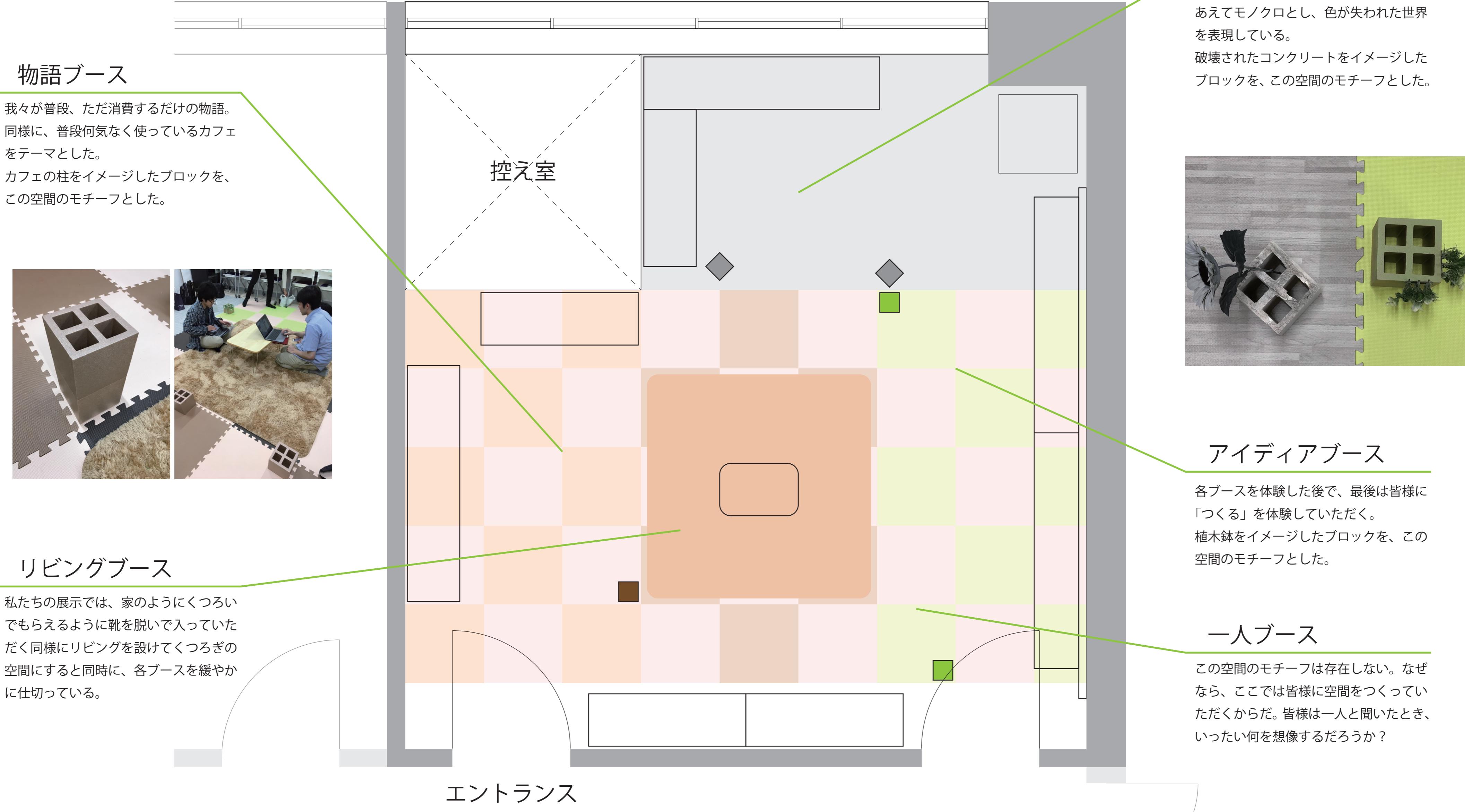


UTa Tané "May Festival 2019" Interior design



Plan (S=1/20)



本棚やトレー、絵画などを配置した。カフェボードがポイントである。



モノクロの絵画や本が並んでいる。そこに色をつくり出していく。

Introduction

「つくる」ってなんだろう？

日本人の多くは、「つくる」に対して良いイメージを持っていることだろう。なぜなら、日本の経済成長を支えてきたのは、紛れもなく日本の優れた技術なのだから。最近では至る所でイノベーションが叫ばれており、我々は日々、新しい何かを生み出す必要性に駆られているようだ。

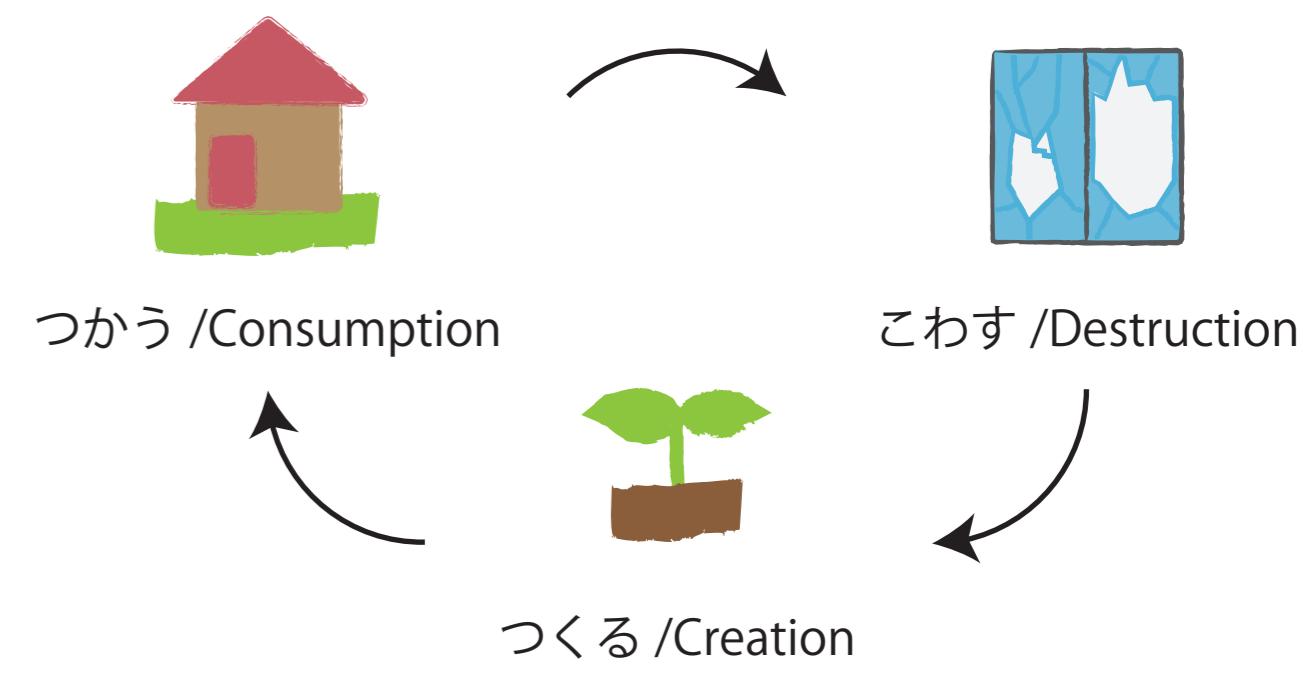
一方で、何かを「つくる」ためには何かを「こわす」段階が存在するということを忘れてはいけない。建築を例に見てみよう。高度経済成長期に団地やプレハブ住宅が大量に建てられたのは、戦争により多くの住宅が失われたからである。また、現在も盛んに行われている再開発の裏には、失われた既存の市街地が存在する。

そして、何かを「つくる」とそれを大切に「つかう」必要がある。建築学者の西山卯三は実際に使用されている建物を調査し、居住者の潜在的な要求を把握する手法を確立した。また、建物の環境や設備などを適切に管理・運用する、ファシリティマネジメントやコミュニケーションという概念も確立されている。

「つくる」は、「こわす」と「つかう」に支えられているのである。

参考図書 長澤泰編著『建築計画（改訂版）』市谷出版社、2011年

Concept



今回の展示では、この「つくる」の背後にある二つのフェーズに着目し、「つくる」→「つかう」→「こわす」→「つくる」の循環を体感しながら、各作品を体験できるようにインテリアをデザインした。様々な視点で「つくる」眺めることができ私たちの展示を、皆様に楽しんでいただきたいと思う。

色ブース

当たり前に存在している色。この空間はあえてモノクロとし、色が失われた世界を表現している。

破壊されたコンクリートをイメージしたブロックを、この空間のモチーフとした。



アイディアブース

各ブースを体験した後で、最後は皆様に「つくる」を体験していただく。

植木鉢をイメージしたブロックを、この空間のモチーフとした。

一人ブース

この空間のモチーフは存在しない。なぜなら、ここでは皆様に空間をつくっていただくからだ。皆様は一人と聞いたとき、いったい何を想像するだろうか？



植物のようにアイディアが芽生える。



和気あいあいとした作業風景である。